

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00205

研究課題名(和文)インプロ(即興演劇)とジェンダーのアクションリサーチ～演者の変容過程に着目して～

研究課題名(英文)Action Research on Impro (Improvisational Theatre) and Gender: Focusing on the Transformation Process of Performers

研究代表者

直井 玲子(Naoi, Reiko)

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：00734295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、インプロ上演形式「ザ・ベクデルテスト」(以下「BT」)の理念・構造とその特徴について、考案者リサ・ローランドらへのインタビュー調査とワークショップ実践から、BTがこれまでのインプロにおける男性中心の物語構築の方法への問題意識から考案されていること、「What else? (他に何かがあるか)」をキーワードに、「女性」の多様で複雑な日常を描き出すことを目的に開発されていったことが明らかになった。また、BTをプロジェクトチームで繰り返し上演し続けることによる演者の変容過程について、共同主宰者を務めた私たち(直井・園部)、男性演者、乳幼児のいる女性演者に着目して描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本では研究的にも実践的にも充分に進められてきていない「ジェンダー」の視点からのインプロ実践研究を前進させたものである。ザ・ベクデルテストという上演形式は、その重要性がインプロの国際会議で指摘されながらも、それを日本のなかでいかに上演できるのか、その実践を通してどのような問題提起が可能となるのかは具体的に検討されてこなかった。本研究は、考案者ローランドの理念を引き継ぎながら、日本のジェンダーの文脈での効果的な上演形式を再構築しており、そこに学術的・社会的意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated the concept, structure and characteristics of the improv performance format "The Bechdel Test" (BT) through interviews with creator Lisa Rowland and other improvisers and through their workshops. We found that BT was conceived as a response to the male-centered method of constructing a story in improv up to now, and that it was developed with the aim of depicting the diverse and complex daily lives of "women" using the keyword "What else?". We also described the transformation process of the performers through repeated performances of BT by our project team, focusing on 1) the co-organizers (Naoi and Sonobe), 2) male performers, and 3) female performers with infants.

研究分野：応用演劇

キーワード：インプロ(即興演劇) ジェンダー アクションリサーチ 演劇 パフォーマンス

1. 研究開始当初の背景

日本は、世界的に見ても性をめぐる格差の大きな国となってしまうている。世界の動向に目を向けると、芸術におけるジェンダー・バイアス克服の試みは、近年、様々な場面でなされるようになってきた。例えば、2024年以降の「アカデミー賞」の作品賞選考の基準の1つに「女性」や「LGBTQ」等の人々の起用が掲げられたことは、日本でも報じられ話題となった。

本研究が扱うのは、「インプロ」と呼ばれる即興演劇パフォーマンスにおけるジェンダー・バイアスの問題である。インプロでは「何かが意識することなく自然に生まれてくる」ことを意味する「スポンタニティ」(spontaneity)が重視され、事前に打合せをせずとも共演者間で展開が共有されるよう「普通にする」こと (be average) を生かした物語創造が行われる(高尾 2006)。加えて標語「yes, and」に代表されるように、共演者のアイデアを否定せず受容した物語進行に主眼が置かれる (Holzman 2009)。インプロの実践的問題は、インプロが「即興」であるがゆえに、インプロ演者の有するジェンダー観やジェンダー・ステレオタイプの影響を大いに受け物語が構築される点にある。

そこで、本研究が着目するのが、インプロにおけるジェンダー・バイアス克服を目指した上演形式「ザ・ベクデルテスト」(The Bechdel Test、以下「BT」)である。BTは、米国サンフランシスコのインプロ劇団「BATS Improv」のLisa Rowlandが考案し、2016年8月に同劇団で上演開始されたものである。BTは、インプロの国際的実践組織の主催会議でも招聘上演されるなど、インプロ界で近年注目を浴びつつある。日本では、研究代表者(直井)が米国でRowlandに直接指導を受け、愛媛・東京等全国各地でBTのワークショップや公演を開催し、実践的調査研究を進めてきた。しかし、日本におけるBTの知名度は未だ低く、実践・研究ともに発展途上であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、BTの構造及び背景にある理念を明らかにするとともに、日本で継続的にBT実践を行うことによるインプロ演者の変容過程を解明することである。そして、日本におけるインプロ実践方法論をジェンダーの視点から再構築し、社会における性をめぐる格差の是正に向けた知見を、演劇パフォーマンスの領域から提示する。

3. 研究の方法

本研究では、アクション・リサーチを採用し、研究者も実践に積極的に関わりながら、実践者と協働しながら研究を進めていった。まず、本研究の実施主体となる「インプロとジェンダー探究プロジェクト」(以下「PJ」)をインプロ演者とともに結成し、本研究の遂行者である直井・園部も同PJのメンバー(=実践者)として関わり、他のメンバーとともに実践を繰り返していった。

PJにおいては、定期的にBTを学ぶワークショップ、そして一般観客を募ったBTのパフォーマンス上演を実施することを通して、PJメンバーのパフォーマンスの詳細を記録していった。また、ワークショップには考案者Rowlandらを招聘し、BTの具体的な実践方法を学ぶとともに、その背景にある理念や考え方について聞き取った。

加えて、PJ開始前、そして上演後を中心に、PJメンバーを対象としたインタビュー調査を重ね、BTに向き合うPJメンバーたちの意識とその変容過程を語りとして蓄積していった。

4. 研究成果

(1) BTの構造とその特徴、理念とその背景にある考え方の検討

BTの構造とその特徴

BTは、概ね7、8人の演者によって上演される、「ロングフォーム」と呼ばれる長編のインプロ上演形式の一種である。上演時間は60~90分程度である。コロナ禍においては、BATS Improvでは、Zoomを用いたオンライン上演も実施されてきた。物語の主人公を2人以上の「女性」とし、主人公役のみ演者を固定し、その主人公たちの日常の場面を多様な角度から複線的に描いていく。

具体的には、「はじめのモノローグ」「ペインティング」「スナップショット」「おわりのモノローグ」「ディスカッション」という構造をとっている。まず、司会者が観客から出された単語のなかから1つ選ぶ。主人公は、その単語を「タネ」にしてモノローグを始める。途中で「ペインター」と呼ばれる役割を担う演者から「フリーズ」と声がかかる。ペインターの役割は、その主人公の名前や身の回りにあるものなどのアイデアを観客から募り、出されたものから1つずつ選ぶことで、その主人公のキャラクターをその名の通り「ペイント(色付け)」していくことである。名前などが決まったらペインターは退出し、「フリーズ」していた主人公がモノローグの続きを語り始める。これをすべての主人公(通常2~3名)に対してそれぞれおこなう。すべての主人公がモノローグを終えた後、「スナップショット」が始まる。スナップショットとは、それぞれの主人公の多様性・多面性を描くことを目的になされる、断片的な場面の連なりで

ある。まさに主人公一人ひとりのアルバムの写真を眺めていくように、その主人公の日常の一場面（3～10分程度）が複線的に展開される。概ね、モノローグにおいて、主人公同士の関係が描かれることは稀であるが、「スナップショット」の途中で、主人公同士が出会うシーンがなされる場合もある。スナップショットの後には、再び主人公のモノローグとなる。スナップショットを踏まえ、他の主人公のモノローグに重ねるかたちで、交互に自らのモノローグを語っていく。前の主人公が語った言葉の断片に影響を少しずつ受けながら、語りは次第に短くなっていく。最後のひとことまで続けられ、パフォーマンスが終わる。その後、いまなされたパフォーマンスに対して、ジェンダーの視点から振り返り、観客と対話する「ディスカッション」という時間が設定され、終演となる。

こうした構造をとるBTの特徴として、次の3点を挙げるができる。

第1に、女性演者が物語に積極的に登場しやすいことである。BTの主要なルールの1つが、主人公を担えるのは「女性」である、というものである。そして、その女性主人公の「モノローグ」から上演が始まる。さらに、その女性主人公の「キャラクター」を観客との対話を通して形づくっていく。また、そこで描かれるものが女性主人公の多面性であるため、他の演者たちはその目的を達成するためにパフォーマンスをおこなうこととなる。このように、女性演者が物語の中心を担うための「許可」と「責任」がBTの構造の至るところにちりばめられている。

第2に、男性演者の普段のパフォーマンスの省察を促すことである。前述したように、BTの主人公は「女性」とであるという絶対的ルールにより、男性演者はまず、「自分は主人公ではない」ということを自覚する。そして、それを前提として、女性主人公の多面性を描くためにシーンに介入していくことが常に求められる。こうしたなかで、男性演者たちは、普段のインプロパフォーマンスがいかに男性中心で物語が展開されていくかということに気づいていくのである。

第3に、自身の性別を問わず、なされたパフォーマンスについてともに考える対話の場が設定されていることである。1つは、演者同士の対話の場であり、稽古のなかで、いまなされたパフォーマンスはジェンダー的にどのように見えるのか、そしてそれを演じていた演者はどのようなことを感じたのか、といったことが繰り返し語られる。もう1つは、演者と観客との対話の場であり、BTの最後に確保されている「ディスカッション」の時間である。Rowlandは、この時間を出入り自由の「アフタートーク」とは捉えておらず、「BT上演の一部」として位置づけている。こうした場が、インプロとジェンダーの問題をともに考えるための「当事者性」を演者や観客に付与する場として機能していると考えられる。

BTの理念とその背景にある考え方

Rowlandらへの調査から明らかになったのは、BTは、これまでのインプロにおける物語構築とは異なる方法や理念を有しているということである（図表1参照）。まず、これまでのインプロにおける物語構築が「男性中心」に進められてきた点に問題意識の中心がある。主人公役は男性演者が担い、女性演者はその周辺的なキャラクター、すなわち男性演者をケアしサポートするという役回りに「自然に」なってしまう。男性演者の演じる主人公には名前がつけられるが、女性演者の演じるキャラクターには名前がつけられず、「母さん」などと呼ばれる場合も少なくない。Rowlandらは、こうしたインプロにおける女性の描かれ方の偏りに問題意識をもっているのである。BTが、こうしたこれまでのインプロにおける物語構築とは距離をとり、「それとは異なるもの」を徹底することによって、「女性の多様で複雑な日常を描く」ことが可能になっていると言える。

これまでのインプロにおける物語構築	BTにおける物語構築
“What comes next?”（次どうなるか）	“What else?”（他に何があるか）
前に進み続ける	様々な表情のコラージュ
アクションに基づく	キャラクターに基づく
直線的	非直線的（多面的）

図表1：物語構築の違い

(2) 演者の変容過程の分析

BT実践を通じたインプロ演者の変容過程としては、PJの共同主宰者を務めた私たち（直井・園部）、男性演者、乳幼児のいる女性演者、に焦点化して分析をおこなった。

PJの共同主宰者を務めた私たち（直井・園部）の変容過程

1点目は、PJの共同主宰者を務めた私たち、すなわち直井と園部の変容過程である。その「出発点」として、相互インタビューを繰り返し、「なぜ私たちはインプロとジェンダーの実践研究をしなければならなかったのか」を、BTとの出会いに着目して言語化した。その結果、私たちは、必ずしも全く同じジェンダー観を持っているわけではないこと、互いに影響を受けながら、そして時々共鳴しながら、PJ開始に至っていることが描かれた。その際の両者をつなぐキーワードとして、「勇氣」と「自信」という2つがあることが見出された。

2年間のPJ終了後、私たちは再び相互インタビューをおこない、本PJにおけるBTの上演継続が“私たち”を変えたのかを明らかにすることを試みた。直井は、相互インタビューで語った

自身の変化を整理・再考し、またもう 1 人の共同主宰者である園部から語られた直井の変化に触れながら、2 年間の PJ を通した自身の変化を省察した。その結果、直井は、「上演チームを率いること」への自信のなさが軽減されたこと、「インプロ演者としての自分」を許せるようになったこと、という 2 つを自身の変化としてまとめた。園部は、その直井の記した変化に呼応し、その変化をより象徴的に示していると考えられる最終上演で直井が演じた主人公によるモノローグとシーンを取り上げ、その変化を考察した。以上を通して、2 年間の上演継続を経て、直井が目の前の共演者とその場でのやりとりにより身を任せながら演じていく姿を描き出すとともに、上演継続により「自信」の意味合いも変化していったことを示した。

今後の課題としては、2 度目の相互インタビューのなかで語られている園部の変化についても、直井の変化と重ねながら明らかにしていくことが挙げられる。

男性演者の変容過程

2 点目は、本 PJ にメンバーとして参加した男性演者 A さんの変容過程である。A さんは、当初 BT へ出演に対して「恐れ」を抱いていたが、ときが経つにつれてその「恐れ」が軽減されていった。本研究では、A さんへの PJ 開始前インタビューと PJ 参加中の上演後インタビュー、そしてそれら一連の自身の語りを省察するインタビューをもとに、その「恐れ」がいかなるもので、それがいかに軽減されていったのかを明らかにした。

A さんの「恐れ」は、共演者や観客の「女性」に対するものとして語られていた。それは換言すれば、「自身のジェンダー・バイアス表出への恐れ」であることが明らかになった。また、登場人物という「隠れ蓑」を被り、「恐れ」を「弱さ」として表出させることで「恐れ」は軽減されていることが見出された。

本研究では A さんに焦点化した。他の男性演者の変容過程は明らかにできていない。今後、インタビューデータをさらに分析することを通して、「男性演者」の多様性も描いていきたい。

乳幼児のいる女性演者への着目

3 点目は、乳幼児のいる女性演者への着目である。共同主宰者の 1 人である園部は幼児の子育て中であるほか、本 PJ 実施期間に 2 名の女性演者が出産を経験した。彼女らは、出産を理由に PJ 参加を辞めなかった。しかし、出産前と同様に舞台に立てたかといえば決してそうではない。今回の上演への出演は見送ろう、主人公を担うのはやめよう、などといった意識が“自然に”働いてしまう。赤ちゃんがいることを理由に舞台に出られないのだとしたら、それ自体が大きなバイアスなのではないか。そうした問題意識のもと試行的に開催したのが、スピンオフ上演「ザ・ベビデルテスト」(The Baby-del Test)であった。

彼女らへのグループインタビューから明らかになったのは、たとえ、舞台上であったとしても、そばに我が子がいる状態で舞台に立つと、「私はこの子の母親である」という「現実」に引き戻されてしまうということであった。そしてそれは、「現実」と距離をとろうと、自分以外の誰かを演じようとするほど、強まっていくことが見出された。

母親インプロバイザーが「母親である」という役割から降り表現できる場をつくるには何が必要なのか。こうしたことは本研究ではまだ十分に検討できていない。今後、彼女らとの実践を繰り返すなかで検討を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 園部友里恵、直井玲子	4. 巻 第75
2. 論文標題 インプロとジェンダーの実践研究は私たちを変えたのか：「ザ・ベクデルテスト」上演継続のアクション・リサーチを終えて（1）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 三重大学教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 園部友里恵	4. 巻 89 (4)
2. 論文標題 インプロ上演形式「ザ・ベクデルテスト」における男性演者の「恐れ」とは何か?：「弱さ」と「加害者性」のはざままで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 616-628
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 直井玲子・園部友里恵	4. 巻 第20号臨時特集
2. 論文標題 「なぜ私たちはインプロとジェンダーの実践研究をしなければならなくなったのか：「ザ・ベクデルテスト」との出会いをめぐる相互インタビューから」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 149-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 直井玲子
2. 発表標題 「インプロとジェンダー探究プロジェクト」を共同主宰した私の変容
3. 学会等名 日本演劇学会「演劇と教育研究会」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 直井玲子、園部友里恵、豊田夏実、下村理愛、中込裕美、江戸川カエル
2. 発表標題 子育て中の母親インプロバイザー（即興演者）の上演参加：「ザ・ベクデルテスト」上演をめぐる語りから考える
3. 学会等名 日本質的心理学会 第20回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 園部友里恵
2. 発表標題 即興演劇における男性演者のジェンダー・バイアス表出への恐怖とその克服
3. 学会等名 日本教育社会学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 直井玲子
2. 発表標題 インプロ（即興演劇）とジェンダーの実践研究における自己変容：乗り越えることから、協働することへ
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 園部友里恵、直井玲子、石田喜美
2. 発表標題 『ザ・ベクデルテスト』をワークショップする：インプロ（即興演劇）とジェンダーの探究2
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 直井玲子、園部友里恵
2. 発表標題 いかに『準備』しないか：即興演劇の上演形式「The Bechdel Test」における関係性の「発見」
3. 学会等名 表象文化論学会第16回研究発表集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 園部友里恵、直井玲子、菅田真理子、中込裕美、中村真季子、堀光希、飯田正人、石田喜美
2. 発表標題 「ザ・ベクデルテスト」をパフォーマンスする：インプロ（即興演劇）とジェンダーの探究」（企画シンポジウム）
3. 学会等名 日本質的心理学会 第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 園部友里恵、直井玲子
2. 発表標題 「誰が「決める」のか：即興演劇の上演形式「The Bechdel Test」における主人公像の協働構築の方法」
3. 学会等名 第15回研究発表集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	園部 友里恵 (Sonobe Yurie) (80755934)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------